

## 困難な時代に詩のともし火

洲浜 昌三

昭和40年代、詩は社会的にも広く認知され、同人誌にも活気があった。しかし詩を取り巻く状況も変わり、高齢化も進んで同人誌の継続は困難な時代になった。

そんな状況下で、創刊時の同人である小寺、池沢、手皮が健筆を振るい、手皮は編集者として老舗の屋台骨を支えている。他の同人も詩歴が長いベテラン。日常から生まれるモチーフを巧みな表現で詩に昇華する。

冒頭の「青鮫の庭」（足立悦男）はエッセイに近い散文詩。愛好する金子兜太の句「梅咲いて庭中に青鮫が来ている」を筆頭に七句を引用し、「対象と自己の間に『造る自分』を置く」兜太の造形俳句を身に引きつけて語る。優れた作品で学ぶことが多かった。「箸」（井上義明）「竹を折り曲げたときの両方の端を／合わせてつまむ」箸の様々な使い方を提示しイメージが広がる。「思い草」（花井 満）ナンバン・ギセルは古代では「思い草」。万葉集の恋の歌を引用して、自己の思いを重ねる。時代を越える「思い」に心も広がり和む。「水と栖む」（花房睦子）では、日々切迫した命の危機と覚悟が矢のように読む者の胸に突き刺さる。「つるし柿」（伊嶋正枝）の詩では親しみと温かみが残る。「青谷弥生人」（手皮小四郎）復元された弥生人の顔を見て似ている友人に会いに行く物語性が面白い。土着的な親近感とフィクションから生まれるイメージが示唆に富む。「風船」（滝本勤）風船との様々な関係に人生のリアリティが見えて面白い。「鏡」（池澤眞一）では、希望や不満や愚痴まで写る鏡から生まれるユーモアが楽しい。エッセイ「“雨ニモマケズ”考」（小寺雄三）は、目から鱗、長年の常識に風穴が開く好論考だった。「編集後記」では、掲載した田村のり子の追悼詩の背景を深く探る。毎号この欄は読み応えがあり「菱」を読む楽しみの一つである。 （日本詩人クラブ会員「石見詩人」同人）